かささぎ 通信 第30号

2015年1月9日　発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一四年十一月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和8年5月号初出の三作品を読みました。

「小猫」・「パチンコ」

「銀作」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

（都合により、十二月は休会としました。）

明けましておめでとうございます。

二〇一五年も、毎月第二金曜日の午後、「赤い鳥」に掲載された森三郎作品を年代順に読んでいきたいと思います。

二〇一二年七月に「森三郎の作品を読む会」を発足してから、二年半の間に、五十六作品を読んできました。（「役行者物語」「ジョセフ・ヒコゾー」は二か月連載。「堺騒動」も含む。）約一二〇編の「赤い鳥」掲載作品中の半数近くを読んできたことになります。

読み重ねるうちに、何となく、森三郎の筆致を感じ取ることができるようになりました。その副産物といったらいいでしょうか、例えば、森三郎作品とされていた、中村吉麿名義の「堺騒動」（昭和7年11月より三か月連載）が、森鷗外の「堺事件」を鈴木三重吉が子ども向けに書き直したものであることが分かりました（「かささぎ」通信　第24号参照）。作品を時系列で読んできたからこそ、この作品が、森三郎作品ではないことに気づいたのだろうと、会員同士話しています。

しかし、専門の研究者の会ではないので、ある作品が森三郎の独自の創作なのか、再話なのか、分からなかったりすることも多々あります。また作品のモチーフについて直接ご本人からお聞きしたい思いになることもしばしばあります。

そんな時、ふと思い出す文章があります。宮澤清六「兄のトランク」（筑摩書房　一九八七年）の中の一節です。兄・宮澤賢治の作品に関する話です。

（前略）私はレコードの音楽についても、詩や童話についても、沢山聞かねばならないことがあったのですが、質問もしないでしまい、また話してもくれなかったのです。

これは今考えますとむしろ実にいいことだった思うのです。私が沢山の大切なことまでも、他人が苦労して得た答えを鵜呑みにして、ダイジェストや虎の巻で間に合わせ、「結論」と答えだけを知ってしまい、その方程式や道程を自分で考えないことの習性に陥らないために、ありがたいことだったと思います。

――「映画についての断章」より――

私たちも「森三郎の作品を読む会」で、作品を通して、森三郎さんの人となりを少しでも理解できるといいなと思います。そのためにも、いっしょに作品を読む仲間の増えることを願っています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

十一月に読んだ作品から

「パチンコ」はYの字型の木の枝にゴムをつけて、雀などを撃つのに使う、当時の子どもたちの遊び道具です。人の目に当たったりして危ないからと、先生からはパチンコ遊びを禁止されていました。でも、内緒で持ってきていた友達のパチンコがなくなる事件が、タイトルの由来です。この話には、家が貧しくて、学校へ通えなくなった小学校五年生の子どもが、赤ん坊をおぶって、小さな子たちを並ばせ兵隊ごっこをしている場面があります。森三郎は時局ものを書かなかったといわれていますが、昭和六年の満州事変の始まりから、昭和八年三月には日本が国際連盟から脱退するという時代の姿は、子どもの遊びの中に否応なく現れているということでしょうか。主人公の少年の名は「民男」、民男に嫌がらせをしたその少年の名が「武造」という「民」「武」の対比も、三郎さんの意識の中にあったかもしれません。

○　次回予定　2月13日（金）午後1時～3時

『赤い鳥』昭和8年7月号初出作品

「一人相撲」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）・**「乳母」**